

(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第20-2集

野々井遺跡 II

近畿自動車道松原すさみ線建設に伴う発掘調査報告書

1997年3月

大阪府教育委員会
財團法人 大阪府文化財調査研究センター

(財) 大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第20-2集

野々井遺跡 II

近畿自動車道松原すさみ線建設に伴う発掘調査報告書

1997年3月

大阪府教育委員会
財団法人 大阪府文化財調査研究センター



野々井遺跡調査地点（その1～その6）遠景・1993年撮影（南から）



野々井遺跡調査地点（その1～その6）遠景・1993年撮影（南西から）



野々井道路その1 A地区全景（西から）



野々井道路その1 B地区全景（北西から）



野々井遺跡その1 C地区全景（北から）



野々井遺跡その1 A地区57-OD（住居跡）全景（北東から）



野々井遺跡その2 全景（北西から）



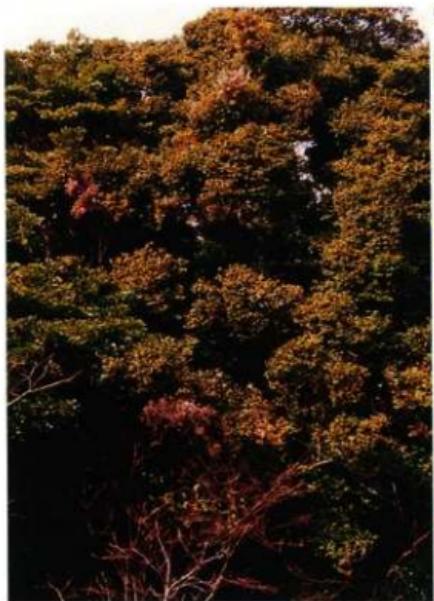
野々井遺跡その2 (2-C) 1~3-OD (住居跡) 全景（北西から）



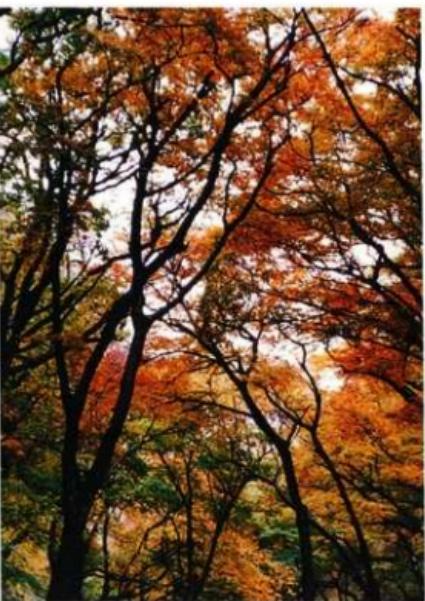
野々井遺跡その6 全景（南東から）



野々井遺跡その6 12-OX遺物出土状況（北から）



①照葉樹林：島根県松江市



②冷温带林（ブナ林）：島根県大山



③二次林（アカマツ林）：島根県三瓶山



④スギ植林：島根県松江市

序 文

大阪府堺市の南部に広がる泉北丘陵一帯には、我が国最古の須恵器生産地である陶邑窯跡群をはじめとする埋蔵文化財が数多く分布しています。この泉北丘陵の北西地域を、関西国際空港の主要アクセス道路である近畿自動車道松原すさみ線が通過することとなったため、予定地内の埋蔵文化財の取り扱いについて日本道路公団ならびに関係者と協議を重ね、万全の調査体制で臨み、格段の努力を重ねて参りました。

本書は近畿自動車道松原すさみ線建設に先立って実施した発掘調査のうち、堺市野々井に所在する野々井遺跡の調査について報告したものであります。発掘調査は大阪府教育委員会の指導のもと、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が担当いたしました。調査終了後、大阪府埋蔵文化財協会と財団法人大阪文化財センターが統合し、財団法人大阪府文化財調査研究センターとなって整理事業が引き継がれ、今回ここにその成果の報告書を作成できました。

一部は平成6年に大阪府埋蔵文化財協会から報告書を刊行しておりますが、今回の報告書では、その1・2・6の調査区の部分に相当します。今回の調査では弥生時代中期から中世にかけての遺構・遺物を検出いたしました。特に弥生時代中期では、大型で3期の重複が確認された竪穴住居跡を含む5棟分が検出されたほか、広鉢未製品を保管していたと考えられる土坑や掘立柱建物跡、溝、ピット、流路などがあり、丘陵部での弥生集落の実態の一端を把握することができました。特に土坑内より出土した広鉢未製品は、木製品の製作技術や工程、使用工具などについて考える上で、たいへん興味深い成果がありました。

最後になりましたが、本調査を実施するにあたっては、多大なご協力をいただいた日本道路公団、地元堺市などの関係各位にご尽力を賜りましたことを深く感謝いたします。

今後とも、大阪府教育委員会の文化財保護行政にご理解とご協力をいただきますようお願い申し上げます。

平成9年3月

大阪府教育委員会
文化財保護課長 田 中 宏

序 文

野々井遺跡は、大阪府堺市の中野々井に所在する遺跡であります。この遺跡の位置する泉北丘陵一帯には多くの遺跡が所在し、特に我が国における須恵器生産地の大拠点として全国的によく知られている地域です。この泉北丘陵の一角をなす櫛丘陵と呼ばれている丘陵北部に、近畿自動車道松原すさみ線の建設が計画されました。この道路は、周知の遺跡である大庭寺・野々井遺跡を計画路線内に含んでいたため、昭和61年度に桧尾・野々井・大庭寺・小代の4地区での試掘調査を実施いたしました。その結果、和田川以東の地区で縄文時代後期から中・近世にいたる多量の遺物を包含することが明らかとなり、中でも野々井遺跡では弥生時代を中心とする遺構や土器、木製品が検出されました。

以上の成果をもとに関係各位が協議し、野々井遺跡の発掘調査が昭和63年から平成5年の6次にわたって実施することになりました。調査の結果、弥生時代中期の集落などの具体像が判明しました。その弥生集落は今回の成果で調査区の北側に大きく広がる可能性が予期されるとともに、住居の構成としては大型・小型竪穴住居がセットとなり、50m前後ほどの間隔をもって立ち並んでいた可能性も考えられました。また、古墳時代の遺構では5世紀後半の須恵器を並べた祭祀的な土坑が検出され、須恵器の生産集団との関連を考える上でも興味深い成果がありました。

最後に、発掘調査および整理事業の実施にあたっては大阪府教育委員会、日本道路公团大阪建設局、堺市教育委員会をはじめとする関係各位にご協力を賜りましたことを深く感謝いたします。

今後とも当センターへのご支援とご協力を賜りますようお願いいたします。

平成9年3月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

理事長 坪井清足

例　　言

1. 本書は近畿自動車道松原すさみ線建設工事に先駆けて調査した大阪府堺市野々井に所在する野々井遺跡の第1・2・6（その1・2・6）次の発掘調査報告書である。

2. 調査は日本道路公団大阪建設局大阪工事事務所の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。

3. 現地調査期間及び担当者は以下のとおりである。

野々井遺跡その1 1988年7月1日～1989年3月25日（昭和63年度）

鈴木秀典（大阪市文化財協会）・田中龍男

野々井遺跡その2 1990年7月1日～1991年3月25日（平成2年度）

京嶋　覚（大阪市文化財協会）・田中龍男

野々井遺跡その6 1992年6月24日～1993年3月25日（平成4年度）

田中龍男・亀田　学（大阪府教育委員会、現：熊本県教育委員会）

4. 1995年4月1日に財団法人大阪府埋蔵文化財協会と財団法人大阪文化財センターが統合されたため、両組織の事業を引き継いだ財団法人大阪府文化財調査研究センターが整理作業をおこない本書を作成した。

5. 調査の実施にあたっては日本道路公団大阪建設局大阪工事事務所、堺市教育委員会、堺市野々井自治会、堺市野々井水利組合などの地元関係各位の協力を得た。

6. 本書の遺構写真は遺構については各調査担当者がおこない、遺物写真及び焼き付けは小倉　勝（現：名神高速道路内遺跡調査会）、加茂幸彦が担当した。

7. 航空写真測量はその1をサンヨー（株）、その2を日本工事測量（株）、その6は（株）日測にそれぞれ委託し、発掘調査に伴う微化石分析（花粉分析・珪藻分析）は川崎地質（株）に委託した。

8. 第VI章の付章については川崎地質株式会社の渡辺正巳・古谷正和両氏に執筆を依頼し、玉稿を頂いた。
9. 本書の執筆は京嶋 覚、田中龍男がおこない、挿図・図版作成及び編集は田中が担当した。
10. 発掘調査及び整理で作成した図面、写真、出土遺物などは、財団法人大阪府文化財調査研究センター南部調査事務所で保管している。広く活用されることを希望する。

凡 例

1. 本書に掲載した地形図、遺構実測図、その他の図に付された北方位はすべて座標北を示している。
2. 標高は全てT.P. (m) で表示している。
3. 本書で使用している地区割り方法は財団法人大阪府埋蔵文化財協会が国土座標（第VI系）を基準に独自に設定したものである。本文中の地区呼称や記号については旧協会の「発掘調査規定」にしたがって実施し、詳細は第III章で一括して記載している。
4. 本書で使用している色調の表現は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準上色帖』第7版（1987年）の色片との比較で記載している。
5. 本書に掲載した遺跡分布図は、大阪府文化財分布図（1991年3月）より抜粋した。なお、遺構番号は独自の番号に振り替えている。
6. 本書の本文・図版内で使用している略号は、地区名を示している。使用した略号は以下の通りである。
その1 A地区=(1-A)、その1 B地区=(1-B)、その1 C地区=(1-C)
その2 A地区=(2-A)、その2 B地区=(2-B)、その2 C地区=(2-C)

野々井遺跡II本文目次

(その1・2・6)

序文

例言

凡例

第I章 調査に至る経過	1
第II章 遺跡の環境	2
第III章 調査の方法	4
第IV章 調査の成果	8
第1節 野々井遺跡（その1・2・6）の層序	8
第2節 自然流路の変遷	12
第3節 その1・2の調査	16
第1項 調査概要	16
第2項 遺構と遺物	16
1. 弥生時代中期	16
2. 弥生時代後期	74
3. 飛鳥時代	80
4. 平安時代後期	84
第4節 その6の調査	99
第1項 調査概要	99
第2項 遺構と遺物	99
第V章 まとめ	122
第VI章 付 章	124
第1節 陶邑北部における縄文時代以降の植生変遷	

(川崎地質株式会社 渡辺正巳・古谷正和)

挿 図 目 次

第1図 野々井遺跡位置図	1
第2図 野々井遺跡と周辺遺跡分布図 (1/50,000)	3
第3図 野々井遺跡第1～6次（その1～6）調査地点位置図 (1/5,000)	4
第4図 調査区地区割模式図	5～6
第5図 野々井遺跡その1・2・6断面模式図 (1/800)	9～10
第6図 自然流路変遷図	13
第7図 自然流路A2・A3復元図	14
第8図 杭列平・立面図 (2-C)	15
第9図 流路A3東側畦畔平面図	16
第10図 野々井遺跡その1・2遺構配置概略図 (1/400)	17～18
第11図 57-OD平・断面図 (1-A)	19～20
第12図 57-OD出土遺物 (1-A)	21
第13図 57-OD出土石器 (1) (1-A)	21
第14図 57-OD出土石器 (2) (1-A)	22
第15図 1100-OD平・断面図 (1-B)	24
第16図 2-OD平・断面図 (2-A)	25～26
第17図 2-ODP i t断面図 (2-A)	27
第18図 3-ODP i t断面図 (2-C)	27
第19図 3-OD平・断面図 (2-C)	28
第20図 3-OD内428-OP出土遺物 (2-C)	29
第21図 1-OD I期平・断面図 (2-C)	31～32
第22図 1-OD II期平・断面図 (2-C)	33～34
第23図 1-OD III期平・断面図 (2-C)	35～36
第24図 1-OD内233・235-OS板状木片出土状況 (2-C)	37
第25図 1～4-OB遺構配置概略図 (1-C)	38
第26図 1・2-OB平・断面図 (1-C)	39～40
第27図 3-OB平・断面図 (1-C)	41～42

第28図	3-O B内153-O P出土遺物 (1-C)	43
第29図	4-O B平・断面図 (1-C)	44
第30図	5-O B平・断面図 (1-C)	45~46
第31図	113・130-O S、139・164~166-O S平・断面図 (1-C、2-C)	49~50
第32図	113-O S木製品出土状況 (1-C)	51
第33図	113-O S出土遺物 (1) (1-C)	52
第34図	113-O S出土遺物 (2) (1-C)	53
第35図	113-O S出土遺物 (3) (1-C)	54
第36図	113-O S出土遺物 (4) (1-C)	55
第37図	113-O S出土遺物 (5) (1-C)	56
第38図	113-O S出土石器 (1-C)	57
第39図	139-O S出土遺物 (2-C)	59
第40図	130-O S出土遺物 (1-C)	60
第41図	702-O O平・断面図 (1-B)	61
第42図	702-O O出土石器 (1-B)	62
第43図	118-O S平・断面図 (1-C)	63
第44図	118-O S出土遺物 (1) (1-C)	64
第45図	118-O S出土遺物 (2) (1-C)	65
第46図	122-O O平・断面図 (1-C)	66
第47図	122-O O出土遺物 (1-C)	67
第48図	132-O O平・断面図 (1-C)	69
第49図	132-O O出土遺物 (1-C)	70
第50図	132-O O出土木製品 (1) (1-C)	71
第51図	132-O O出土木製品 (2) (1-C)	72
第52図	132-O O出土木製品 (3) (1-C)	73
第53図	55・56-O S、138-O S平・断面図 (1-C、2-C)	75~76
第54図	55-O S出土遺物 (1-C)	77
第55図	56-O S出土遺物 (1-C)	78
第56図	138-O S出土石器 (2-C)	79
第57図	138-O S出土遺物 (2-C)	79

第58図	561-O S、53・60・61・63-O S遺構配置概略図（1-B、2-C）（1/200）	81～82
第59図	53-O S断面図（2-C）	83
第60図	53-O S出土遺物（2-C）	83
第61図	1～3、77-O B遺構配置概略図（1-B、2-C）（1/200）	85～86
第62図	1-O B平・断面図（1-B）	87～88
第63図	2-O B平・断面図（1-B）	90
第64図	3-O B平・断面図（1-B）	91～92
第65図	527・570・602・588・604・605-O P出土遺物（1-B）	93
第66図	616-O P出土遺物（1-B）	94
第67図	77-O B平・断面図（2-C）	95～96
第68図	野々井遺跡その6遺構配置概略図（1/400）	97～98
第69図	27-O D平・断面図	100
第70図	59-O H平・立面図	101
第71図	27-O D出土遺物	102
第72図	Pit群（700～702-O D）遺構配置概略図（1/80）	103～104
第73図	700-O D平面図・Pit断面図	105
第74図	50-O O平・断面図、出土遺物	106
第75図	701-O D平面図・Pit断面図	107
第76図	702-O D平面図・Pit断面図	108
第77図	8-O S平・断面図	109
第78図	8-O S出土遺物	111
第79図	12-O X断面図	112
第80図	12-O X平・立面図	113～114
第81図	12-O X出土遺物（1）	115
第82図	12-O X出土遺物（2）	116
第83図	12-O X出土遺物（3）	117
第84図	12-O X出土遺物（4）	118
第85図	12-O X出土遺物（5）	119
第86図	76-O O平・断面図、出土遺物	120
第87図	谷内出土遺物	121

第88図 試料採取地点位置図	124
第89図 野々井遺跡No.1－1～3、2地点の花粉ダイアグラム	131～132
第90図 野々井遺跡No.3地点の花粉ダイアグラム	133
第91図 大庭寺遺跡の花粉ダイアグラム	134
第92図 伏尾遺跡No.1地点の花粉ダイアグラム	135
第93図 伏尾遺跡No.2－1地点の花粉ダイアグラム	136
第94図 伏尾遺跡No.2－2地点の花粉ダイアグラム	137
第95図 伏尾遺跡No.3－1地点の花粉ダイアグラム	138
第96図 伏尾遺跡No.3－2地点の花粉ダイアグラム	139
第97図 平井遺跡の花粉ダイアグラム	140

写真図版目次

- 卷頭図版 1 上 野々井遺跡調査地点（その1～6）遠景・1993年撮影（南から）
 下 野々井遺跡調査地点（その1～6）遠景・1993年撮影（南西から）
- 卷頭図版 2 上 野々井遺跡その1 A地区全景（西から）
 下 野々井遺跡その1 B地区全景（北西から）
- 卷頭図版 3 上 野々井遺跡その1 C地区全景（北から）
 下 野々井遺跡その1 A地区57—OD（住居跡）全景（北東から）
- 卷頭図版 4 上 野々井遺跡その2 全景（北西から）
 下 野々井遺跡その2（2-C）1～3—OD（住居跡）全景（北西から）
- 卷頭図版 5 上 野々井遺跡その6 全景（南東から）
 下 野々井遺跡その6 12—OX遺物出土状況（北から）
- 卷頭図版 6 上左 ①照葉樹林：島根県松江市
 上右 ②冷温帯林（ブナ林）：島根県大山
 下左 ③二次林（アカマツ林）：島根県三瓶山
 下右 ④スギ植林：島根県松江市

図版1 遺跡の遠景

上：調査地全景（東から） 下：調査地全景（南から）

図版2 その1 B地区の遺構

上：B地区全景（西から） 下：B地区全景（南から）

図版3 その1 C地区の遺構

上：C地区全景（西から） 下：C地区全景（東から）

図版4 その2 A・B地区の遺構

上：A地区全景（南から） 下：B地区全景（東から）

図版5 その2 C地区の遺構

上：C地区全景（北東から） 下：C地区全景（南東から）

図版6 その1 AからC地区の遺構

上：1-A南側断面 下：1-B・1-C間中央畦断面（東から）

図版7 その1 B地区の遺構

上：B地区南側断面 下：B地区西側断面

図版8 その1 C地区的遺構

上：C地区北側断面 下：C地区南側断面

図版9 その1 B地区的遺構

上：自然流路（A2流路）全景（西から） 下：自然流路（A2流路）全景（南から）

図版10 その1 B・2 C地区的遺構

上：自然流路（A3流路）全景（北から） 下：自然流路（A2流路）断面（南から）

図版11 その2 C地区的遺構

上：杭列（A～B断面） 下：杭列（B～C断面）

図版12 その2 C地区的遺構

上：杭列（D～E断面） 下：杭列（E～F断面）

図版13 その1 A地区的遺構

上：57-O D検出状況（南から） 下：57-O D掘削状況（南から）

図版14 その1 A地区的遺構

上：57-O D全景（東から） 下：57-O D内 炉（855-O O）断面

図版15 その1 B地区的遺構

上：1100-O D全景（南から） 下：1100-O D検出状況

図版16 その2 A・C地区的遺構

上：2-O D全景（南から） 下：3-O D全景（南から）

図版17 その2C地区の遺構

上：1-OD全景（北から） 下：1-OD II期柱穴（北から）

図版18 その2C地区の遺構

上：1-OD I期の柱穴（410-OP） 下：1-OD I期の柱穴（413-OP）

図版19 その2C地区の遺構

上：1-OD II期の柱穴（263-OP） 下：1-OD II期の柱穴（265-OP）

図版20 その2C地区の遺構

上：1-OD III期の柱穴（242-OP） 下：1-OD III期の柱穴（256-OP）

図版21 その2C地区の遺構

上：235-OS板状木片出土状況 下：233-OS板状木片出土状況

図版22 その1C地区的遺構

上：1~4-OB全景（西から） 下：1・2-OB全景（東から）

図版23 その1C地区的遺構

上：3-OB全景（東から） 下：4-OB全景（南から）

図版24 その2C地区的遺構

上：5-OB全景（西から） 下：5-OB内361-OP断面

図版25 その1C地区的遺構

上：113-OS全景（北東から） 下：113-OS東側畦断面

図版26 その1C地区的遺構

上：113-OS東側畦断面（右55-OS・左113-OS） 下：113-OS西側畦断面

図版27 その1C地区的遺構

上：113-OS遺物出土状況 下：113-OS遺物出土状況

図版28 その1C地区的遺構

上：113-OS遺物出土状況 下：113-OS遺物出土状況

図版29 その1C地区的遺構

上：113-OS木製品出土状況 下：113-OS木製品細部

図版30 その2C地区的遺構

上：139-OS全景（南から） 下：139-OS遺物出土状況

図版31 その1C・2B地区的遺構

上：702-OO全景（東から） 下：118-OS全景（東から）

図版32 その1C地区の遺構

上：122-OO全景（北から） 下：122-OO断面及び遺物出土状況

図版33 その1C地区の遺構

上：132-OO遺物出土状況 下：132-OO断面

図版34 その1C地区の遺構

上：132-OO木製品出土状況 下：132-OO木製品出土状況

図版35 その1C・2C地区の遺構

上：55-OS全景（南西から） 下：138-OS全景（南東から）

図版36 その1C地区の遺構

上：55-OS遺物出土状況 下：56-OS遺物出土状況

図版37 その1B・2C地区の遺構

上：561-OS全景（南から） 下：53・60・61・63-OS全景（西から）

図版38 その1B地区の遺構

上：1～3-OB検出状況（西から）

下：1～3-OB検出状況（南から）

図版39 その1B地区の遺構

上：2・3-OB全景（東から） 下：2・3-OB全景（南から）

図版40 その1B地区的遺構

上：1-OB Pit断面（北から） 下：1-OB Pit断面（東から）

図版41 その1B地区的遺構

上：2・3-OB Pit断面（南から） 下：2-OB Pit断面（西から）

図版42 その1B地区的遺構

上：2・3-OB Pit断面 下：3-OB Pit断面（東から）

図版43 その6の遺構

上：その6全景（東から） 下：その6全景（西から）

図版44 その6の遺構

上：27-OD全景（南から） 下：27-OD遺物出土状況（炉内）

図版45 その6の遺構

上：700～702-OD（Pit群）全景（東から）

下：（上）8-OS断面・（下）8-OS遺物出土状況

図版46 その6の遺構

上：12-O X全景（東から） 下：12-O X全景（東から）

図版47 その6の遺構

上：12-O X遺物出土状況 下：12-O X遺物出土状況

図版48 その6の遺構

上：12-O X断面（東から） 下：76-O O全景（南から）

図版49 出土遺物（その1・2）

57-O D・113-O S出土遺物

図版50 出土遺物（その1・2）

113-O S出土遺物

図版51 出土遺物（その1・2）

113-O S出土遺物

図版52 出土遺物（その1・2）

113-O S出土遺物

図版53 出土遺物（その1・2）

130-O S・139-O S出土遺物

図版54 出土遺物（その1・2）

139-O S・118-O S出土遺物

図版55 出土遺物（その1・2）

118-O S・122-O O出土遺物

図版56 出土遺物（その1・2）

55-O S・56-O S出土遺物

図版57 出土遺物（その1・2）

138-O S・588-O P・605-O P・616-O P出土遺物

図版58 出土遺物（その6）

27-O D・8-O S出土遺物

図版59 出土遺物（その6）

8-O S・12-O X出土遺物

図版60 出土遺物（その6）

12-O X出土遺物

- 図版61 出土遺物（その6）
12-O X出土遺物
- 図版62 出土遺物（その6）
12-O X出土遺物
- 図版63 出土遺物（その6）
12-O X・76-O O出土遺物
- 図版64 出土遺物（その1・2）
57-O D出土石製品
- 図版65 出土遺物（その1・2）
57-O D・113-O S・702-O O出土石製品
- 図版66 出土遺物（その1・2）
57-O D・138-O S・702-O O出土石製品
- 図版67 出土遺物（その1・2）
132-O O出土木製品
- 図版68 出土遺物（その1・2）
132-O O出土木製品

表 目 次

第1表 火山灰分析結果	125
第2表 陶邑北部の縄文時代以降の植生変遷	141

付 図 目 次

付図1 野々井遺跡その1～6 全体図 (1/400)	
付図2 野々井遺跡その1・2 遺構配置図 (1/200)	
付図3 野々井遺跡その6 遺構配置図 (1/200)	
付図4 野々井遺跡その2 1-O D平・断面図 (2-C)	

第Ⅰ章 調査に至る経過

野々井遺跡は大阪府岸和田市野々井、桃山台に所在する遺跡で、1965年代に造成された泉北ニュータウンの光明池地区の工事によって発見された弥生時代～中世にかけての複合遺跡である。

遺跡は大阪府の南部に広がる泉北丘陵の一角をなす梅丘陵と呼ばれる丘陵北部およびその北西部を流れる和田川の氾濫原上に形成された遺跡である。当初の調査は大阪府教育委員会が1974～1976（昭和49～51）年に丘陵上の桃山台団地開発に伴って発掘調査をおこない、旧石器～室町時代にかけての遺構・遺物を検出している。

今回の調査は1986（昭和61）年に日本道路公団の近畿自動車道松原すさみ線建設ルートが、野々井遺跡の範囲を通過することが明らかとなったため、大阪府教育委員会の指導のもとに財団法人大阪府埋蔵文化財協会が試掘調査を実施した。試掘調査は1987（昭和62）年2月に道路建設予定地内を石津川から和田川間の約3kmにかけて、約100ヶ所以上のトレンチ調査を実施した。その結果、予想に違わず全域で遺構・遺物の存在が確認され、野々井地区では弥生時代の土器や木製品が数多く出土した。この試掘結果を受けて、大阪府教育委員会と日本道路公団大阪建設局が協議をおこない、大阪府教育委員会の指導のもと財団法人大阪府埋蔵文化財協会が1988（昭和63）年から野々井遺跡の発掘調査を実施することとなった。

調査は第1～6次調査まで実施され、第1次調査は1988（昭和63）年7月1日～1989年3月25日・第2次調査は1990（平成2）年7月1日～1991年3月25日・第3次調査は1992（平成4）年2月3日～3月25日・第4次調査は1992年4月3日～6月30日・第5次調査は1992年4月28日～10月31日・第6次調査は1992年7月1日～1993年3月25日の間で調査がおこなわれた。野々井遺跡の総調査面積は約21,730m²が実施された。

今回の調査報告書は1988～1993年に実施された野々井遺跡第1・2・6次調査のもので、前回報告の第3・4・5次地点の丘陵部より西側に位置する和田川の氾濫原にあたる。



第1図 野々井遺跡位置図

第 II 章 遺跡の環境

野々井遺跡は大阪府堺市野々井・桃山台付近一帯に広がる弥生時代～中世の複合遺跡である。当遺跡の所在する堺市は大阪府のほぼ中央部に位置し、泉州地域の北部にあたる。

堺市は北側を大和川に限られ、南は和泉山脈に接し、西側は大阪湾に面している。

この地域は泉北丘陵と呼称される丘陵地帯で、標高80～200m程の丘陵が和泉山脈から大阪湾に向かって派生する大小幾つかの丘陵や段丘で構成される。丘陵は数多くの中小河川によって開析され、丘陵の段丘部周辺には河川の開析作用による大小の谷地形が見られ、沖積地が形成されている。

丘陵は和泉山脈から北西方向に向かって派生し、丘陵の先端部分は緩やかな傾斜をもつ段丘地形となり、堺市の大阪湾付近に広がる平野部へとつながる。泉北丘陵の丘陵や段丘の間は、北西方向に蛇行しながら流れる石津川やその支流である和田川、陶器川などによって開析されている。これらの川の中流域では河川周辺に狭小ながら沖積地が形成されている。野々井遺跡はこのような泉北丘陵の中でも北側に位置する梅丘陵と呼称される地域に立地している。梅丘陵の規模は幅約1.5km、丘陵長は7～8kmで泉北丘陵内でも比較的幅狭の低丘陵であるように思われる。

今回の調査地は、この丘陵西側縁辺部の北西に派生する丘陵の先端部分及び丘陵の前面に広がる氾濫原である。氾濫原の西側には、和田川が南から北方向に蛇行しながら流れ、泉北丘陵の東側を流れる石津川と梅丘陵の先端部分付近で合流し大阪湾へと流れる。

調査地は和田川左岸域の氾濫原上と、丘陵先端部に位置するため、試掘調査が実施されるまで遺構や遺物の有無は不明な地点であった。周辺には、この地で須恵器生産が開始された時期の窯跡として知られているT K73号窯、大庭寺遺跡T G231・232号窯、ON 231号窯などがあり、窯跡に隣接した須恵器工人の村の存在が判明してきている。

泉北地域の旧石器・縄文時代の遺跡は鈴の宮遺跡、西浦橋遺跡、伏尾遺跡、小阪遺跡などがあるがいずれも明確な遺構の確認はされていない。野々井遺跡周辺の同じ時期の遺跡としては、大庭寺遺跡、小阪遺跡などをあげることができる。

弥生時代の遺跡は、石津川流域の水資源を利用し、さらに和田川、陶器川などを利用して広範囲にわたる支流域の氾濫原や低地に生活の基盤を求めたと思われるが、継続性がなく短期間に廃絶したと考えられる。



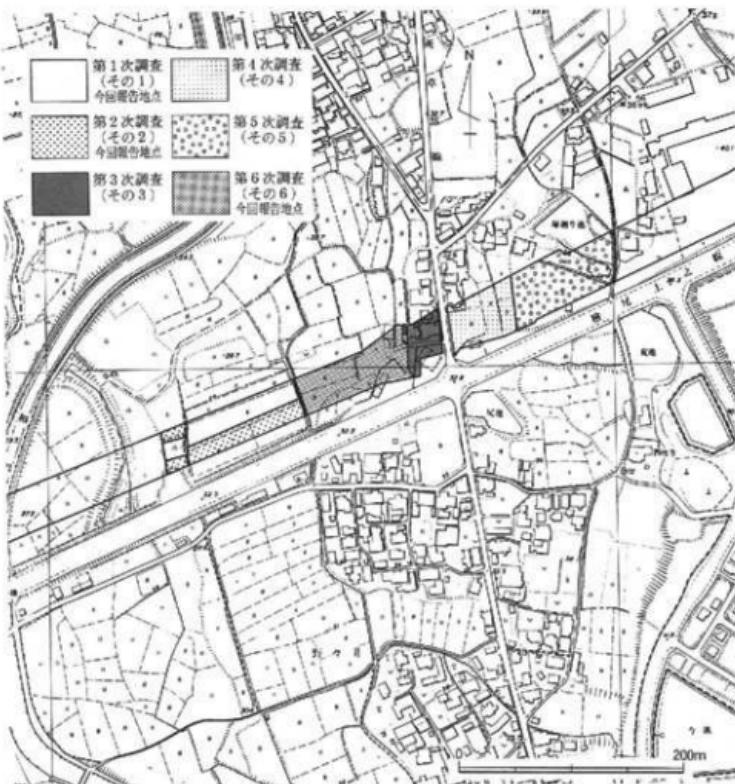
1	野々井遺跡	21	南井清水町遺跡Ⅱ地点	41	山田古墳群
2	大島神社遺跡	22	道山北古墳群	42	山田三古墳群
3	尾遺跡	23	上代遺跡	43	泰木上古墳
4	鶴見町遺跡	24	鶴山町東遺跡	44	大庭寺遺跡
5	空谷寺遺跡	25	西原橋遺跡	45	高木寺遺跡
6	大字下石舟坂塚	26	豊田遺跡	46	中之堀遺跡
7	黒岩町遺跡	27	木屋跡	47	山田遺跡
8	河口村明丁遺跡	28	万世遺跡	48	浜生南遺跡
9	大院町遺跡	29	八田西町遺跡	49	安和池古墳
10	南井清水町遺跡八幡山	30	万崎島遺跡	50	信太子町遺跡
11	大野寺跡	31	大平寺遺跡	51	横尾塚原古墳群
12	取石遺跡	32	小原遺跡	52	牛石古墳群
13	上遺跡	33	東八田遺跡	53	小谷城跡
14	岸部遺跡	34	平井遺跡	54	豊田遺跡
15	十六遺跡	35	東山遺跡	55	西山城跡
16	高生寺跡	36	馬鹿塚遺跡	56	大原遺跡
17	鶴ノ巣遺跡	37	猪籠塚遺跡	57	西山遺跡
18	大和寺跡	38	大之瀬跡	58	西山遺跡
19	八田北町遺跡	39	山園遺跡	59	上北吉遺跡
20	朝上町遺跡	40	型神社遺跡	60	守山遺跡

第2図 野々井遺跡と周辺遺跡分布図 (1/50,000)

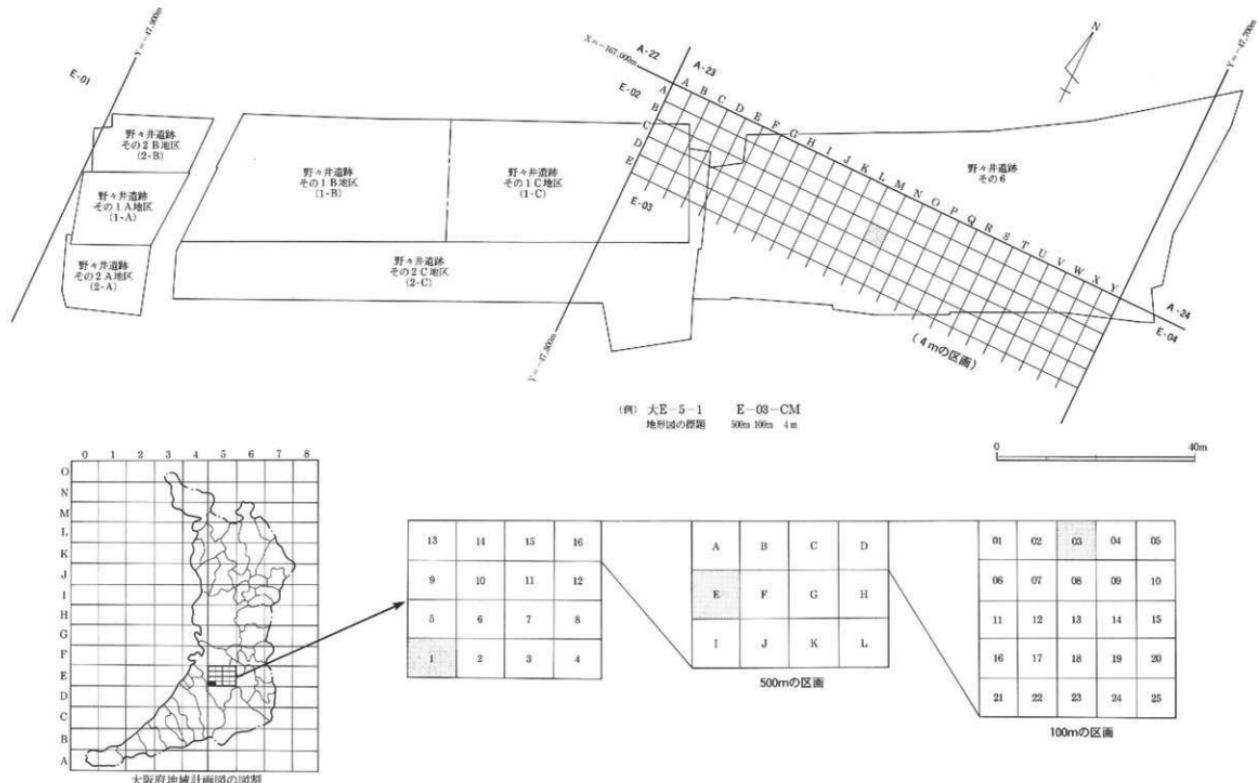
第III章 調査の方法

調査地は和田川の東側（左岸）に広がる氾濫原で実施された。各調査区の調査面積は第一次調査（その1）が2,800m²、第二次調査（その2）が4,140m²、第六次調査（その6）の面積は4,192m²で合計11,132m²である（第3図参照）が、用地買収や地元との調整をおこないつつ調査を実施したため、全面を一つの調査区として開けることができなかった。

発掘調査は日本道路公団及び本体工事の担当者と協議しながらおこない、財団法人大阪



第3図 野々井遺跡第1～6次（その1～6）調査地点位置図（1/5,000）



第4図 調査区地区割模式図

府埋蔵文化財協会が定めた『発掘調査規定』に基づきながら実施した。

調査地は、調査年度によって入り組んだ形状であったため第4図のように調査区を各年度ごとに個別に地区設定しながら調査を実施した。

1988（昭和63）年度に実施されたその1の調査では、調査区を3分割し1-A・1-C地区の掘削土を1-B地区に仮置きしながら調査を実施した。1-A・1-C地区調査終了後に反転作業（掘削土の埋め戻し）をおこない1-B地区の調査を実施した。

その2の調査は、1990（平成2）年度にその1（1-B・C地区）の南側で2-C地区を設定し、1-A地区の北側（2-B地区）及び南側（2-A地区）調査を実施した。

その6の調査は、1992（平成4）年度にその1・2の農道を挟んだ東側で実施した。調査区の東側は盛土整地され住宅化されていた地点であった。

検出された遺構・遺物の実測及び遺物の取り上げに用いた地区名（地区割り）は、大阪府発行「大阪府都市計画地形図」の新版1/2,500を使用し、国土座標法による新平面直角座標第VI座標系のX軸（東西方向）、Y軸（南北方向）を基に500mの区画を設定し使用した。

次にこの500m区画にA～Lの記号を付け、さらに25等分し100m四方の区画を作成する。この100m区画には、北西隅から東側に01～25の区画を作り、最後にこの100mを625等分し4m四方の区画を作成した。

上記の方法で作成した区画は、南北方向（縦方向25行）を先に、東西方向（横方向25行）を後にして大文字のアルファベット（A～Y）で呼称・表記し、2文字の記号で表示している。

区画の表示は南北方向（縦方向）を優先して表示している。（第4図参照）

今回の調査対象地は、「大阪府都市計画地形図」の大E-5-1内の100m区画では6区画のA-23・24、E01～04に位置する。

土層断面図の土色は『新版標準土色帳』を使用し、遺物の出土状況については随時1/20・1/50の図を作成した。

遺構の表記方法は、『発掘調査規定』に定められた略号を使用し、遺構の種類にかかわらず検出順に通し番号を付した。本報告書で使用している記号は以下の通りである。

O B - 建物 O D - 壁穴住居 O O - 土坑

O P - 柱穴 O S - 溝 O X - その他、不明

第Ⅳ章 調査の成果

第1節 野々井遺跡（その1・2・6）の層序（第5図、図版6～8）

各年度に実施したその1・2・6調査区の発掘成果をもとに、当該調査地区における基本的な層序について以下に記述する。その6調査区は流路Bを除いて地層が少ないため、各地層に対する所見は、その2調査地区での観察結果に基づくものである。

第1層：含細礫暗灰色ないし灰黄褐色砂質シルトの作土層で、現代の耕土である。

第2層：含砂黄褐色砂質シルトの作土層で、上部にマンガン酸化物が沈着する。

第3層：含砂黄褐色シルトの作土層で、細礫を少量含み、鉄酸化物の斑紋が見られる。

第4層：調査範囲のはば全域に分布する作土層である。中央部付近では上下2層に分離でき、上部の4A層は含砂灰白色シルト、下部の4B層は黄灰色の含細礫粘土質シルトである。いずれも上部に鉄酸化物の沈着があるが、第3層に比べて酸化物の斑紋は少ない。本層基底面では、その1・2調査区で平安時代後期の掘立柱建物数棟が検出され、下面または基底面で数条の小溝が検出された。本層には平安時代末から室町時代の遺物が包含されている。

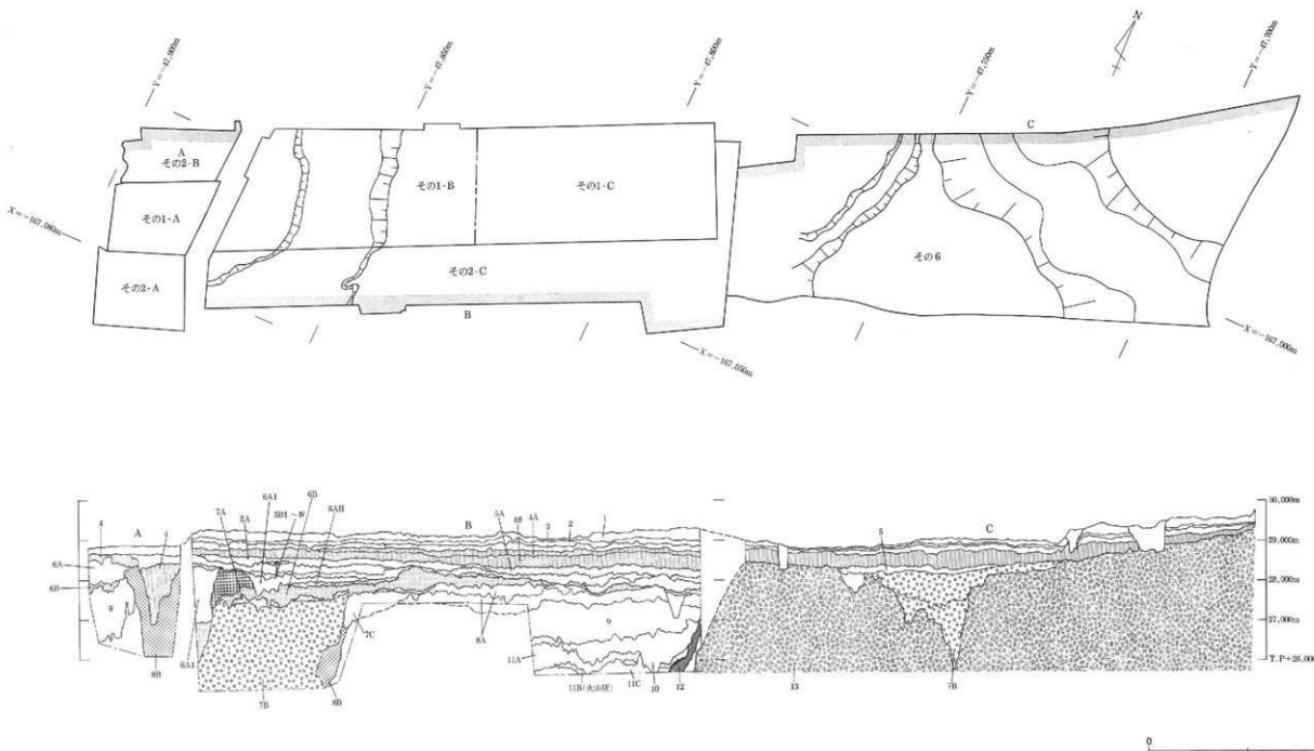
第5A層：黄褐色粘土質シルトで、鉄酸化物が顕著に認められる。その2調査区東部では上面に還元されて青灰色を呈する部分が南西から北東に幅約1mの帯状に確認されたが、これは第4層を耕土とする水田の畦畔が存在した痕跡と思われる。この位置は現代の畦畔とほぼ同じ位置にあり、当該地区における現代の土地区分の成立が第4層の段階（平安時代末から室町時代）まで遡る可能性があることを示している。本層出土の奈良時代末から平安時代初頭の土器は、本層準の時期を示すものではなかろうか。

第5B層：本層は水成層に覆われた2層の作土層からなる。

5B I層は青灰色細～粗粒砂または黄褐色砂質シルトの水成層である。層厚は10cm以下で、層をなさず下位の踏込み跡や轍跡の中に遺存するのみの部分が多い。

5B II層は含砂灰黄褐色粘土質シルトまたは灰白色粘土である。上面で踏込みや轍と思われる小溝、畦畔の可能性のある高まりなどが検出された。

5B III層は灰白色ないし黄白色の細～中粒砂の水成層である。ほとんど層をな



第5図 野々井遺跡その1・2・6断面模式図 (1/800)

さず、下位の踏込み内に遺存するのみである。なお、上面で検出した53-OSを埋める水成層は本層に属すると考えられ、飛鳥IIの土器が出土しており、本層の時期を示唆している。

5 B IV層は淡灰色粘土質シルトまたは含砂灰黄褐色シルトである。本層中からはTK23型式またはTK47型式の須恵器などが出土した。また、第5層の遺物としてTK209型式の土器がまとまって出土しているが、これらも本層に属するものと思われる。

第6 A層：本層は水成層および作土層の2層からなる。

6 A I層は淡灰色砂礫層で、その1・2調査区の西部に分布する水成層である。流路A 3が供給した土砂である。流路A 3を最終的に埋めつくし、さらに溢流して周辺にも土砂の堆積をもたらす。

6 A II層は灰白色シルトないし粘土の作土層で、その1・2調査区の西部にのみ存在する。第6 A I層の分布する範囲でのみ5 B IV層との分離が可能である。

やや淘汰不良で水田耕土であったとしても、それほど長期の耕作期間は想定できない。

第6 B層：灰色ないし黄灰色砂礫の水成層である。その1・2調査区の西部に分布する。

流路A 3に由来する堆積層で、弥生時代第IV～V様式の土器が出土している。この堆積後、流路A 3の東側に砂を主体とする土砂により堤が築かれている。

第7 A層：青灰色または灰白色粘土ないし粘土質シルトの作土層である。上面で畦畔状の遺構が検出された。その1・2調査区の西部のみに分布する。

第7 B層：弥生時代中期の遺構の埋土として残る黒色シルト、中期の流路A 2・Bの埋土である黄灰色細砂または砂礫である。その1・2調査区の流路A 2では多くの木が見られ、流路Bからは多くの土器が出土した。

第8 A層：緑色シルトで、その2調査区の竪穴住居などの遺構の検出面となる。層中から縄文時代晚期船橋式や弥生時代第I様式の土器細片が少量出土した。

第8 B層：黄灰色または灰白色砂礫で、流路A 1を埋める水成層である。

第9層：灰色粘土質シルトで、その1・2調査区西端部で北白川上層式の土器片が出土した。

第10層：青灰色シルトまたはオリーブ灰色粘土で、その1・2調査区東半部の深掘り部で確認された。下位層を削り込んで流れた流路Cを埋める黄灰色砂礫も本層準に

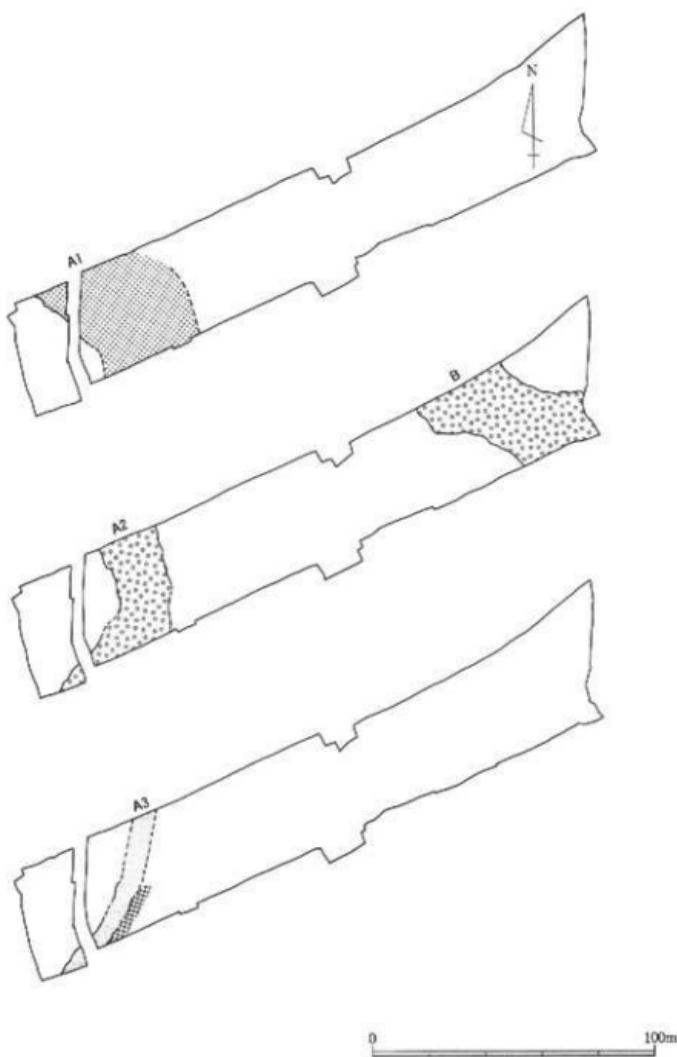
属するものである。

- 第11層：本層はA～Cに分離でき、11A層および11C層はいずれも緑色シルトまたは粘土である。この間に挟在する11B層は淡黄褐色～灰白色を呈する火山ガラスの堆積層であり、分析の結果、横大路火山灰のプライマリーな堆積層であることが判明した。横市小阪遺跡でも類似した火山灰が検出されており、色調や層位的にみて同一のものと思われる。
- 第12層：本層はその1・2調査区で部分的に確認されているのみである。当該調査区の東端の段丘尾根斜面では流れ込むようにして堆積している暗色帶であり、西端では、図示していないが、青灰色細～粗粒砂の水成層である12B層を挟在して含砂礫黑色粘土または青黒色粘土質シルトの12A層と黒色粘土の12C層の2つの暗色帶に分離できるようである。
- このうち12A層からサヌカイトフレイクが採集されている。
- 第13層：灰白色シルトないし粘土で、上面はその6調査区からその1・2調査区に向かって急激に高度を下げる。中位段丘構成層の上部に相当する地層と思われる。

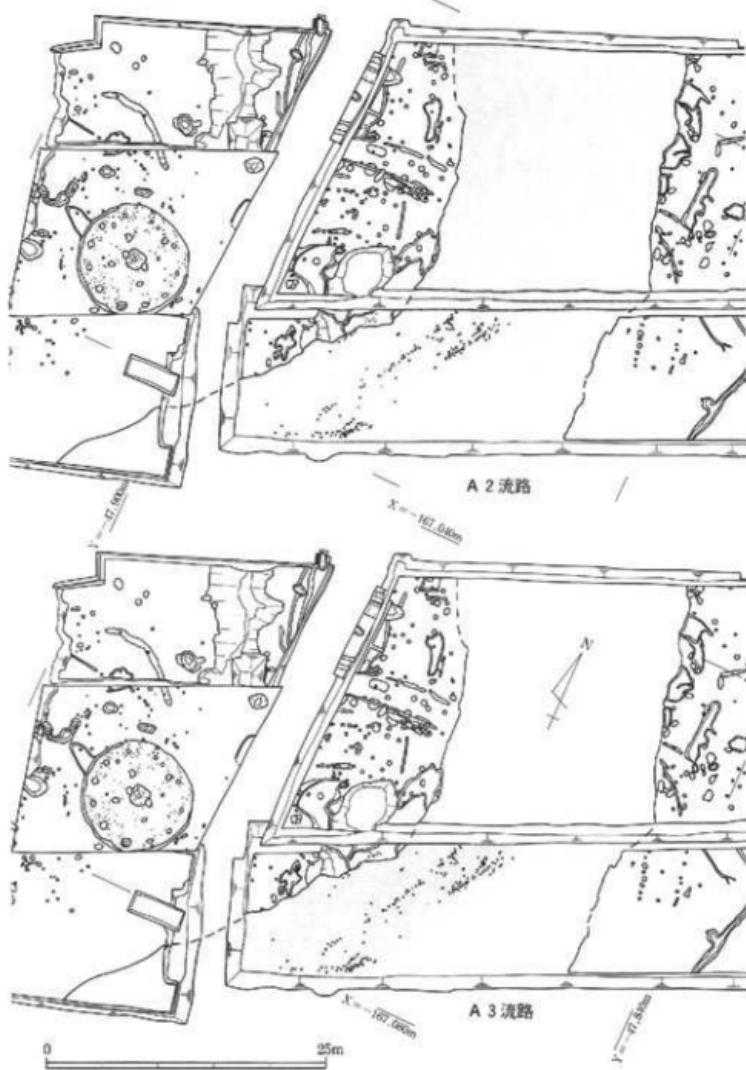
第2節 自然流路の変遷（第6～9図、図版9～12）

調査区域内にはいくつかの流路が、位置を変えつつ存在していた。その2調査区東端の深掘り部で確認できた第10層は、縄文時代早期の横大路火山灰層を流失させた流路Cから供給された堆積物により構成されているが、この時期の流心や方向は確認できなかった。この時点では、その6調査区西端は、その1・2調査区に向かって急に低くなっていたと推測される。それ以後、第8B層を埋土とする、幅約35mの流路A1がその1・2調査区の西端に南から北に向かって、やや西に曲がりながら流れしており、下半部には砂礫層中で流木が確認された。この流路が供給した土砂は弥生時代中期の遺構群のベースになっているが、粒径の大きい砂礫の堆積は流路を完全に埋没することなく、静水時のシルトや粘土を上部に堆積させながらも、なお微地形の低地をなしていた。

その後、この低地部を避けて弥生時代中期に住居などの遺構が形成され、流失から免れたカシなどの古木を利用した木製農具の製作が行われたものと思われる。この前後、低地部には幅約18mにわたる流路A2が流れ、流路の肩口には立ち木の根が落ち込み、下部で



第6図 自然流路変遷図

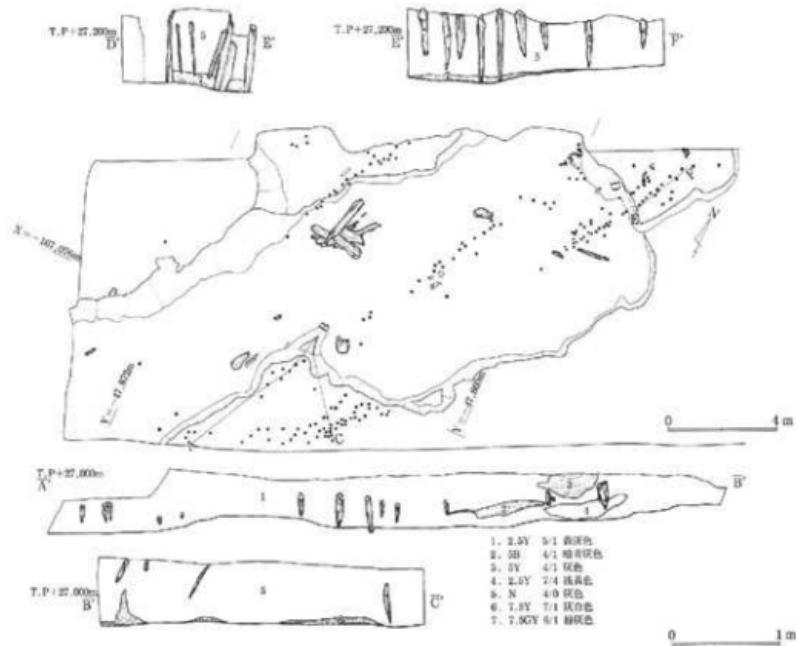


第7図 自然流路 A 2・A 3 復元図

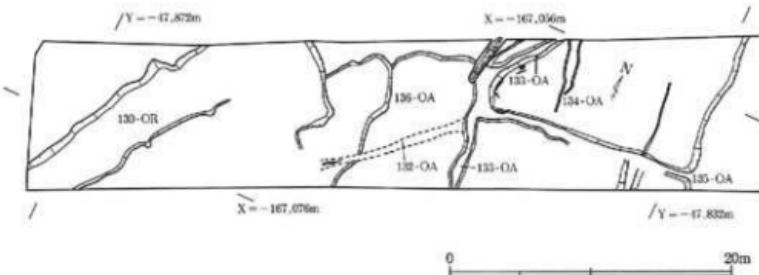
は流木が多数出土した。弥生時代中期ごろに土砂で埋まっているが、この時の土砂も低地を埋め尽くすには至っていない。流路 A 2 は、西寄りの位置に、幅が約 6 m に縮小した流路 A 3 (第 7 図参照) として残り、この水流を利用して東側の低地部で小規模の水田が営まれている。時期は弥生時代中期から後期である (第 9 図参照)。

このあと洪水で水田は埋没し、その 2 調査区のはば全域に溢流堆積をもたらす。この時、堅穴住居などの中期の遺構はすでに埋没していたと推測される。

砂で埋もれた水田は埋積土上部の粘土質シルトを耕して再度水田を作った可能性があるが、畦畔などは検出できなかった。この氾濫を契機に、地形の低い流路東肩部に砂を主体とする土砂を第 6 B 層上面に盛り上げ、下幅約 5 m の堤が構築された。堤の盛土部には多数の木杭 (第 8 図参照) が打ち込まれており堤の強度を増している。この流路が最終的に洪水による 6 A II 層の土砂で埋まるのも弥生時代後期の間であろうと思われる。



第 8 図 杭列平・立面図 (2-C)



第9図 流路A 3東側畦畔平面図

このように、その2調査区西端の流路Aの完全な埋没に至るまでの度重なる土砂の堆積により、調査区東部に比べて西部の地形は高度を上げることになる。こうした弥生時代末期までに形成された微地形が、平安時代後期における屋敷地を西部に選地させることになった。また、流路Aの埋没以降、今回の調査地区内の堆積はこれら流路以外の要因に起源するものと考えられる。

第3節 その1・2の調査

第1項 調査概要（第10図、図版2～5）

野々井遺跡その1・2の調査区は用地買収の進捗状況が非常に複雑で、調査区を6分割しておこなったが、本報告書ではその1・2を統合して報告する事とした。このため、遺構番号が調査区によって不揃いになったため、本文や各図の表記には調査時点の遺構番号を使用し、番号の後に調査区の記号（凡例・6を参照）を併記した。

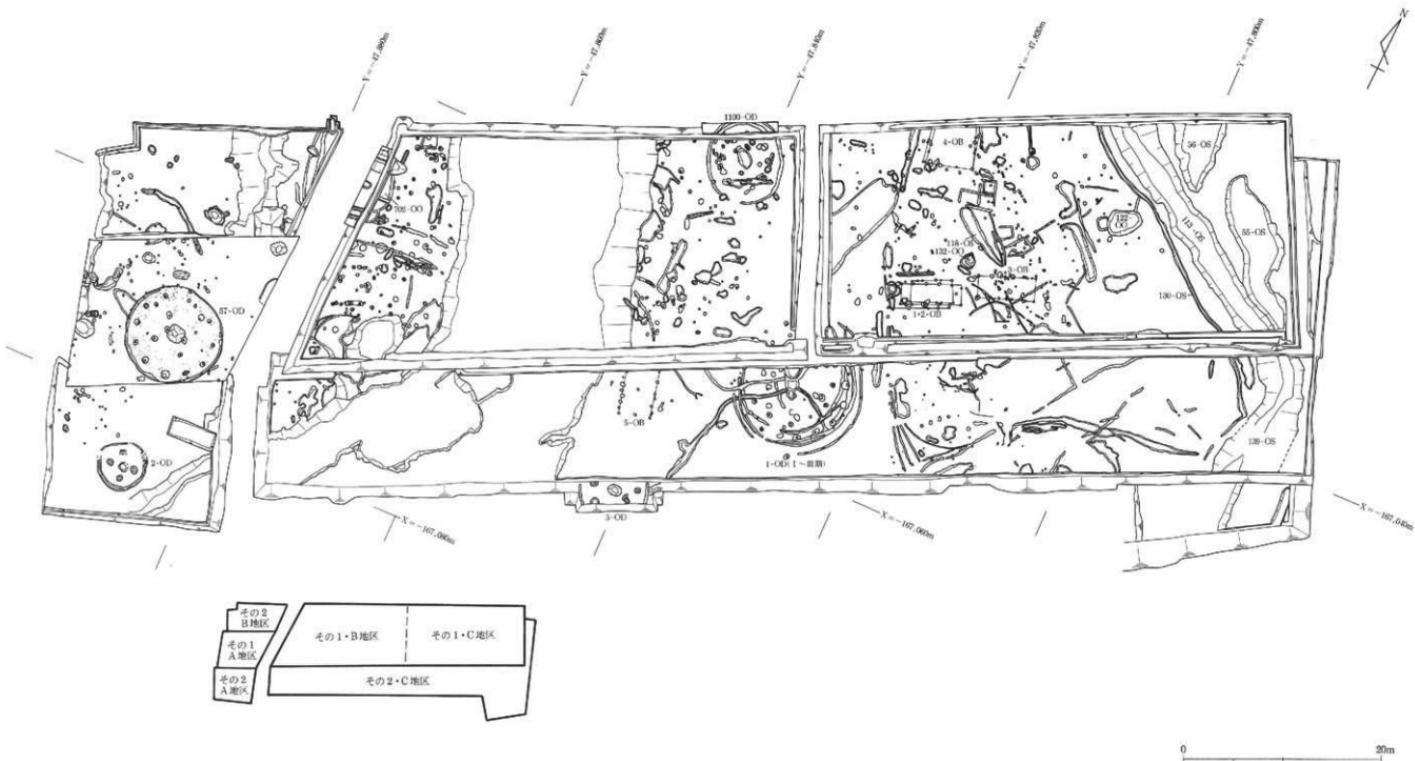
調査地の標高はT.P約29m前後の地点で、堅穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・溝・ビット・杭列・自然河川などがある。

第2項 遺構と遺物

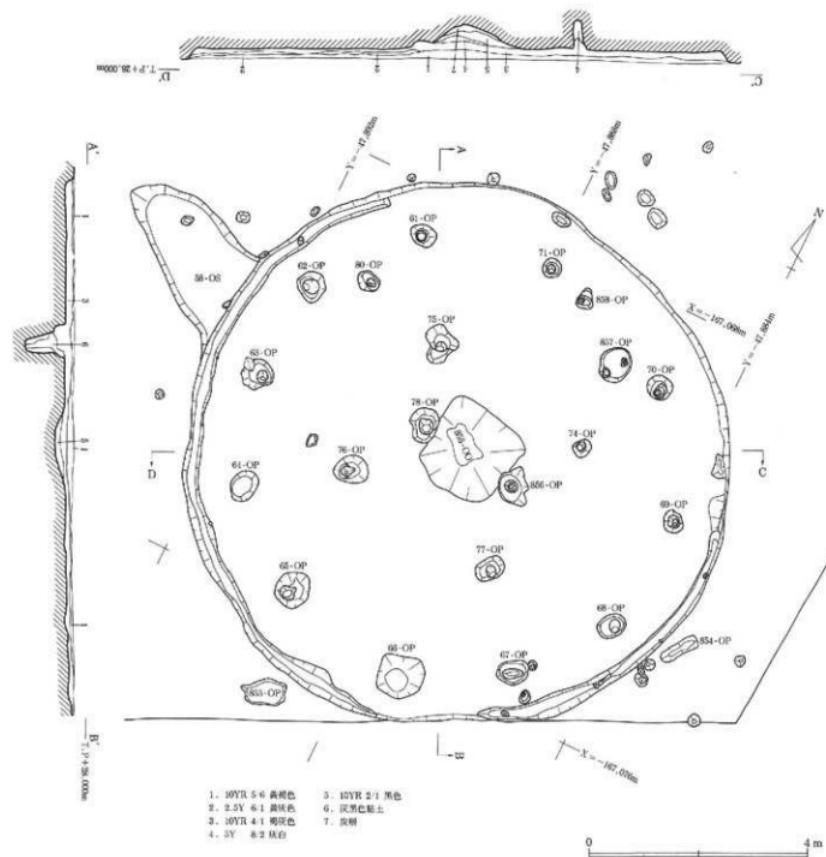
1. 弥生時代中期

57-O D（第11図、図版13・14）

その1のA地区（1-A）で検出されたやや大型の住居跡である。遺構は地山面（青灰



第10図 野々井遺跡その1・2遺構配置概略図 (1/400)



第11図 57-O D平・断面図 (1-A)